

中学校の部 最優秀賞

四国防災八十八話 第24話 あの時すぐに逃げていれば

「あの時すぐに逃げていれば」を読んで

一本松中学校 1年 ^{おおの}大野 ^{さくたろう}朔太郎

僕は、津波が来たら、何よりも大事なことは「逃げること」だと思いました。

この話は、食糧難の時代で、粃（稲の実）を先に安全な場所に運んでから逃げようとしたけれども間に合わず、母親と叔母を亡くしてしまったというものでした。このことから、どんなに大切なものであっても、命以上のものは無いので、「逃げること」を第一に考えるべきだという思いを強くしました。現在で言えば、家には、ペットやスマホ・パソコンなどの通信・電子機器、お金、写真など自分にとって大切なものがたくさんあります。それらを失いたくない気持ちも理解できます。しかし、「戻る」という行為をしてしまっただけでは、命を失う危険性は大きいにあります。ものの代償として命を奪われては、当たり前前の生活を取り戻し、幸せになることはできません。復興は、命があってこそできることなのです。

また、僕は、『ドーン、ドドーンと家に何かが打ち当たる音が数回続いて聞こえた瞬間、突然家が崩れるように倒れ』という、地震の後の静けさの間に津波が押し寄せてくる描写が印象に残っています。なぜなら、僕にほっと息をつく暇を与えないくらいにたたみかけてかけてくる津波の恐怖を感じたからです。まるで自分の家がつぶされるような感覚になりました。もしかしたら、静かになった瞬間、「もう大丈夫だ」と思って油断してしまう人たちがいるかもしれません。それが被害を一層大きくしてしまうことも考えられます。

僕は今、いつ、どこでも、あらゆる情報が瞬時に分かる社会の中で生きています。だから、メディアからの情報や地域の放送をしっかりと確認して、命を守る行動に移したいと思います。この話を読んで、僕の中で起きた変化は、発災時には、一次災害だけを考えるのではなく、二次災害や三次災害まで考えようと思うようになったことです。この考え方は、家族にも伝えたいと思っています。